

# NIEニュース

エヌ・アイ・イー



Newspaper in Education

第88号  
2017.7.15

●特集・新聞を開くと未来が見える—新しい学力観とNIE—▶1~3 ●「NIE タイム」始めてみませんか／新聞調達Q&A▶4~5 ●新聞の「今」——「フェイクニュース」問題から考える／アドバイザー紹介／NIE フラッシュニュース▶6~7 ●〈NIE でいきいき〉〈NIE あれこれ〉▶8

©2017年 日本新聞協会

編集・発行 一般社団法人 日本新聞協会 TEL: 03-3591-4410 (NIE担当) FAX: 03-3592-6577 e-mail: nie@pressnet.or.jp  
〒100-8543 東京都千代田区千代田 2-2-1 日本プレスセンタービル [http://nie.jp] [http://www.facebook.com/Nie47]

## 特集

# 新聞を開くと未来が見える

## —新しい学力観とNIE—

学力観の変化に伴い、新しい時代を生きる子供たちには、得た知識を社会で活用する力が求められている。その育成に向け、3月末に公表された小中学校の学習指導要領は「主体的・対話的で深い学び」の実現を掲げている。いま必要とされている「新しい学び」は、従来とは何が異なるのか、教育界の潮流と併せて解説いただきたい。また、「新しい学び」に新聞がどのような役割を果たせるのか、社会とのつながりの観点から、小中学校での具体的な取り組みを紹介いただいた。

私は現在、愛知教育大学附属名古屋小学校校長を兼務している。小学校では子供たちから学ぶことが多い。二つのエピソードを紹介する。

4月半ばのことだった。学校の近くで例年より早くツバメを見かけた。その日は朝会の日だったので、私は、ツバメを見つけたことを自慢しようと思った。そこで、校庭に並んだ子供たち「今年になってツバメを見つけた人」と聞いてみた。する



愛知県NIE推進協議会会長  
愛知教育大学教授  
NIE全国大会名古屋大会実行委員長  
**土屋 武志**

と、半分以上の子供たちが手を挙げたのだった。予想とちがったので動揺した私は、その場は、「先生も見つけた」という話にして取り繕った。そして、私が子供たちに教えてあげようという姿勢でいたため、子供たちをきちんと見ていなかったのだと反省した。

### 子供の気づきと対話を重視

また、昨年度末、朝の登校時間に教室を回っているときのことだ。4年生が愛・地球博記念公園での校外活動に出かけるといので、「そこで何をするの」と聞いた。ある女の子が「まだ決まっていない」と言う。これ

からすぐに出発するというのに決めていないのかと心配になったのだが、彼女は「多分行ってから、何をするか1時間くらい話し合おうと思う」と言うのだ。その日の天気や場所によって、臨機応変に判断して、何をするかを考えるとということなのである。

考えてみれば、小学校4年生が晴天時案と雨天時案を事前に立てることは不自然だ。子供たちにとって、その日の天候やその場所の広さを体感してその場で考えることこそ、教室から離れる校外活動ならではの学習であると感じかされた。

これからは、教えてあげるとい教師中心の発想の教育でなく、子供たちの気づきと子供同士の対話中心の教育、つまり「新しい学び」が、より大切になるであろう。そのとき、さまざまな情報を持っている子供たちが、その情報源として新聞を

活用して対話する姿が見られることを期待したい。

### 新聞を開き未来を考える

NIEは、子供たち自身から学びを深める活動として取り組むことによって、「新しい学び」を支えるものである。8月3、4の両日開催されるNIE全国大会名古屋大会は、スローガンを「新聞を開く 世界をひらく」とした。その主語は、子供たちである。初日は、ノーベル物理学賞受賞者の天野浩氏とオリンピック女子レスリング選手の吉田沙保里氏、そして中日新聞社の小出宣昭氏、さらに児童生徒が加わった対談を企画している。

未来は予測しにくい。しかし、現在と過去をしっかりと見つけて考えてこそ、よい未来がつけられるだろう。明るい話題、暗い話題、新聞には見つめるべき現在と過去が満載である。全国大会では、NIEだけでなく新聞そのものの未来も語られるだろう。参加者がともに対話する大会になることを目指している。

# 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて 新しい学びが育む「自立的学習者」



日本大学文理学部  
教授  
渡部 淳

今回の中央教育審議会答申（2016年）で、とりわけ注目されるのが学び方の改革である。何を学ぶか（内容）だけでなく、どのように学ぶか（プロセス）が重要だという視点から、「主体的・対話的で深い学び」への移行が求められている。

## 生徒主体の学習システムへ

すでに教育課程企画特別部会の「論点整理」（2015年）でも、「学習者の主体的・協働的な学び（いわゆる『アクティブラーニング』）を実現するには、たんに特定の型を導入するという発想ではなく、『学び全体』を改善する見方が必要である」とされていたから、今回の答申では、学習システム全体

の見直しが提案されているのだといえる。

生徒が主体となる学習システムを、①レポートや論文作成など、自学（リサーチワーク）にかかわる領域、②プレゼンテーション、ディスカッション・ディベート、ドラマワークなど、参加・表現型の学習活動にかかわる領域に大きく分けることができる。ただ、授業でレポートを仕上げたら、その内容を口頭で発表するというように、この二つの領域が相互に浸透的であることはもちろんである。

## 21世紀に育成すべき市民像

今回の答申は、21世紀の学び方改革の世界的潮流である「ティーチング（教え）からラーニング（学び）へ」、「コンテンツ（内容）からコンピテンシー（資質・能力）へ」というパラダイムシフトと軌を一にするものである。

ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書「通称ドロー

ル・レポート（1996年）が、「知ることと学ぶ」（Learning to know）を学習の第一の柱と位置づけ、OECD-DeSeCoのプロジェクトも、言語、シンボル、テキストなどの「道具を相互作用的に用いる」ことを、キーコンピテンシーの第一のカテゴリーに掲げている。

したがって、仮にグローバルスタンダードな教育目標というものがあるとするれば、そのミニマムは、「学び方を習得し、さまざまな角度からものごとをとらえることのできる批判的思考力をそなえた市民の育成」ということになるだろう。

## 教師に求められる

### 「アクティビティ」の習得

「主体的・対話的で深い学び」を実現するには、ゲーム、ロールプレー、シミュレーション、プレゼンテーションやディスカ

ッションなど、学習者が主体となって取り組む「アクティビティ」（学習技法）の効果的活用が不可欠の条件になる。ただ、十分な教師トレーニングのシステムが作られていない現状から、さまざまなレベルの「自己トレーニング」が必要になってくる。

自己トレーニングは実践の中でも可能である。筆者の場合、というと、新聞を活用した「政経レポート」（1980〜2001年 国際基督教大学高等学校の3年生、のべ4500人が制作に挑戦した）がそれで、生徒が自由にテーマを決めて新聞記事の切り抜きを続け、それに文献、インタビュアー、アンケート調査などで集めた情報を加えて、当該テーマに関する論文を書く、という実践である。

速報性と記録性を兼ね備えたメディアである新聞を徹底的に活用することで、生徒の側は、深くテーマを掘り下げる経験ができるし、教師の側でも、毎年100テーマ近い論文を読んで知見を広げられただけでなく、リサーチワークの指導技法もマ

スターすることができた。学びのスパイラルの形成である（詳しくは、渡部淳・和田雅史編「帰国生のある教室」NHKブックス、1991年 参照）。

## 次世代の若者に必要な

### 「新しい共通教養」

「主体的・対話的で深い学び」の実現は、次の時代を担う若者たちに、市民としてのどんな共通体験を持たせ、どんな資質の形成を期待するのかということと表裏の関係にある。

情報化の進展とともに、学習内容はますます速いスピードで陳腐化していく。それだけに、これからの若者には、「自立的学習者」―学び方を身につけ、自ら知を更新していくことのできる新しい教養人―であることが求められる。その共通教養の中に、学びのツールであるアクティビティに関する知識と、豊かで深い自主的な学びの経験、それにアクティビティの運用スキルが含まれることは言うまでもない。

NIEの果たす役割は、いよいよ大きくなると言えるだろう。

特集 新聞を開くと未来が見える

新聞という教科書で広がる「学びの幅」

新学習指導要領では、従前に引き続き、学習材としての新聞が位置付けられている。今改訂の重要キーワード、「主体的・対話的で深い学び」の実現に、新聞活用はどのような可能性を持つのか。日ご



福岡教育大学附属小倉中学校教諭 柴田 康弘

日常的なNIEで目指す問いの発見・深化、知識の活用



札幌市立屯田北小学校教務主任 NIEアドバイザー 朝倉 一民

新学習指導要領の最重要点は「社会に開かれた教育課程」だ。学校と社会とが連携、協働し、よりよい社会をつくるのがねらいとなっている。この意味で新聞の果たすべき役割は大きい。学校と社

会をつなぐツールとして最も手軽にかつ、俯瞰的に社会を見つめることができるからだ。深い学びを生むことに必要なのは教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、問いを生むことである。特に社会科は、社会的事象を教材化することが必要であり、「新聞記事」はなくてはならない存在だ。例えば、6年生社会で学ぶ「地方自治」の学習は、教科書には、自分たちの地域とは別の場所

ろの実践から考えたい。

NIEで実現する「教室と社会のつながり」を意識した主体的・対話的で深い学び

社会科学習で対象とするのは、われわれの目の前にある「社会そのもの」である。そうであるならば、子供にとっての社会科の学びがいと、教室での学習が社会との接点を持ち、さらにその学びがまた社会につながっていくことで得られよう。それは「主体的」な学びであり、級友、そして地域や社会の人々との「対話」を必然とする、「深い」学びであるはずだ。

「なぜ、要望しているのか」「自分たちの校区の児童会館は？」などと比較しながら考える。新聞記事は日々更新される教科書といってもよい。主体的な学びは課題に見通しを持ち、粘り強く取り組むこと

が取り上げられている。そこで、地元の「児童会館設置を」という記事を検索サービスで見つけ、提示する。身近な素材であることから、子供たちも関心が高い。「なぜ、要望しているのか」「自分たちの校区の児童会館は？」などと比較しながら考える。新聞記事は日々更新される教科書といってもよい。

教員7年目ごろから、ここ十数年、私の授業はお決まりの一言、「今日のトップニュースは何だろう？」から始まる。毎回続けるうちに、生徒は事前情報収集してくるようになる。しかし、ニュースⅡ「生モノ」であるからこそ、結論が出にくい。そこで、あれやこれやと議論が始まる。その後は、取り上げたニュースと教科内容との関連を探る。「今日のニュ

である。新聞記事スクラップがまさにそれに当たる。スクラップは、問いを持った課題について、その関連や変化を追うことに価値がある。総合的な学習で「環境」をテーマに取り組みむ際、子供たちに日々の記事から環境に関する記事を集めさせたことがある。このような活動を行った子供たちは、歴史の学習の際には一年を通じて「歴史記事」集めを行った。ここにも毎日更新される新聞の価値がある。

「予期できないニュースを取り上げても、行きあたりばったりでカリキュラムとして、成立しないのでは？」という指摘もあるかもしれない。しかし、より長い目で「教科を学ぶ意義」をとらえれば、それは教科書にはない、リアルな社会科学習として意義を持つ。もちろん、教師の問い方、記事の見せ方、関連づけといった授業技術は、腕の見せどころである。

ICTの普及により、一つの新聞記事を読み、意見を同時入力したり、学習のまとめ新聞を同時編集したりできるようになった。特にグループでの新聞制作は、見出しやレイアウトなどを問う「対話」が生まれ、協働的に作業ができる。本校では子供たち同士が、話し合いながらデジタル新聞を作成しホームページにアップしている。日々、生まれる知識をどのように活用していくか。それには新聞記事は欠かせないものだ。

# 「NIEタイム」始めてみませんか

朝や帰りの会など短い時間を活用し、継続して新聞を読む「NIEタイム」。日常的な活動の積み重ねで、児童生徒や教師はどう変わるのか。学校ぐるみで取り組む小中学校の実践教師に寄稿いただいた。また、実施の最初のハードルである新聞調達の方法についてQ&A形式で紹介する。

## 子供だけじゃない！先生も変わる「NIEたいむ」



北区立滝野川小学校  
教諭  
水木 智香子

2016年11月、米大統領選挙の結果が明らかになった翌日、教室でこんな会話をしていた児童がいた。

「びっくりしたよね！ 予想と違った！」

「なんでだろう」

「わたしだったら、こっちに投票する」

本校の児童は、世界で起きている出来事への関心が高い。それは5年前から取り組み始めた「NIEたいむ」が関係しているのだろう。毎週金曜日の朝15

分間、「NIEたいむ」に取り組み、新聞と触れ合う活動を行っている。新聞協会NIEコーディネーターである関口修司先生が校長として赴任された年から始まり、今も継続している。

「NIEたいむ」では、主に新聞スクラップを行っている。一人1部ずつ新聞を手に取り、お気に入りのものやテーマに沿った記事を選び、要約や感想を書く。発達段階に応じて活動内容を工夫している。低学年は、文章の読解が難しい。写真を選んだり、新聞記事からひらがなやカタカナ、習った漢字を探したりして、新聞と仲良くなる。活動が中心である。高学年になると、感想だけではなく自

分の意見を書くようにしている。週に1度無理のないペースで新聞と触れ合い、社会に目を向ける活動を継続したことで、いつの間にかそれが当たり前になり、自然と世の中のことを考えるようになっていた。そして、世の中のことが少しずつ分かってくると、「なぜ」「どうして」という問題意識を持つようになる。

## 学校ぐるみでのチームNIE新聞と触れ合う機会を作る



立城市立宮崎都立  
小松原中学校教諭  
NIEアドバイザー  
宮本 和典

正解のない課題が待ち受けるこれからの社会を生きる子供たちには、目の前のさまざまな課

なりました。また、15分という限られた時間の中で情報を取り取り、まとめることをくり返していく中で、必要な情報を読み取る力（読解力）や、コンパクトにまとめる力（表現力）も向上したように感じる。

私が本校に初任者として赴任すると同時に始まった「NIEたいむ」は、子供たちの意識や言語能力に変化を与えたが、最も変化を感じるのは、「私」である。

「NIEたいむ」に出会うまで、新聞とはあまり関わることはなかった。しかし、「NIEたいむ」を積み重ねる中で、い

つしか新聞を抵抗なく手に取るようになっていた。社会で起きていることに興味を持つようになっていた。ふとテレビをつけてニュースを見ている自分自身に、意識の変化を感じた。

新聞を読んでいくと、小さな記事の中にはと驚くものがあったり、おもしろい発明があったりと、自分の知らない世界のぞくことができる。そのうれしさを実感したとき、「NIEたいむ」の良さを自分の言葉で子供たちに語りかけることができた。週に1度、子供たちの選ぶスクラップを読むことが、今の私の楽しみとなっている。

そのため、新聞と日常的に触れ合うことができるように、私はこれまでNIEタイム（本校では新聞を活用したスピーチ）に取り組んできた。その概要と工夫した点を以下に述べたい。まずは、指導体制の構築についてである。毎日の帰りの会において、生徒が1人ずつ輪番でスピーチを行うのだが、その際、事前に副担任と一緒に推敲しな

がら作成した原稿を基に発表する。その発表に対し、学級担任がさまざまな形でフィードバックしている。このように、原稿作成時には副担任が、発表時には担任が関わるようにすることで、学校全体で新聞を活用する体制を構築してきた。

次に、記事を選ぶ視点を生徒に与えることである。生徒がスピーチの材料となる記事を選択する際の基準については、原則自由としたが、時期に応じてさまざまなテーマを設け、それに準じた記事を選ぶようにした。

例えば、「夏」「挑戦」「感謝」等のテーマに基づいて記事を選択させるのである。これにより、生徒たちは視点をもって記事を選択する（読む）ようになる。ともに、幅広いジャンルの記事を選ぶようになった。またスピーチの際の視点や表現もテーマと結びつけるため、さまざまな工夫が見られるようになるなどの変化が見られた。

そして、これらの活動を学校全体で展開し、継続していくためには、教師だけではなく、生

徒も含めた学校総体での協働体制を構築する必要がある。そこで、生徒から有志を募り、NIEに関する自治組織（チームNIE）を発足させ、学校ぐるみの活動として、浸透と活性化を図るようにしている。当初は、当番活動が中心だったが、現在では生徒が自ら活動を活性化させるための提案をするなど、取り組みの推進に欠かせない存在となっている。

これらの取り組みを通して、生徒に確実な変化が見られるようになった。教師と世の中のことについて話をするだけでなく、新聞の内容に触れて会話をすることも増えた。同時に、そのような生徒の変化に気付き、NIEタイムの効果を実感する教師が増えたことも、学校総体で取り組む実践の成果と言える。

このように、生徒はもちろん、教師にも新聞と触れ合う機会を日ごろから意図的・計画的に設定することができれば、NIEの実効性を高め、子供たちをさらに成長させることにつながるのではないだろうか。

## 新聞調達 Q&A

「NIEタイム」に取り組む上で、教室に新聞がある環境作りが不可欠だ。教員は、児童生徒が使う新聞をどのように調達すればよいのか。NIE推進協議会の事務局長やNIEアドバイザーらからアドバイスをいただいた。

**Q：「NIEタイム」を行うために学校が新聞を調達する方法はありますか。**

A：学校で教材として新聞を活用する場合に利用できる学校用教材価格を設定している新聞社があります。同じ日付で10部以上購読するなど、社によって条件がある場合はありますが、1部あたり30～40円程度で購入できます。各社の教材用価格はNIEサイトでご確認ください。

**Q：児童生徒の人数分の新聞を用意するにはどうすればいいですか。**

A：学校用教材価格で新聞を購入するほかは、教員が自宅で購読する新聞を学校に持ってきたり、家で購読している新聞を児童に持参してもらったりして集める方法があります。職員室で購読している新聞を再利用することもできるでしょう。

**Q：家庭で購読しておらず新聞を用意できない児童生徒には、どのように配慮すればよいでしょうか。**

A：持参した新聞や学校側で用意した新聞を1か所に集め、NIEタイムの前に自由に持っていく方法にすれば、新聞を用意できない児童生徒も周囲の目を気にすることなく、新聞を使うことができます。

**Q：一人1部新聞を用意できなくても、取り組みますか。**

A：新聞1部を数ページずつに分け、2～3人のグループで取り組むことも可能です。例えば、小学校では「NIE すごろく」作りがおすすめです。一人一人が手

持ちの紙面から写真を切り抜き、すごろくの内容を考え模造紙にまとめるという内容です。中学・高校では、気になるニュースを発表し合ったり、クイズを出題し合ったりする活動などが考えられます。工夫次第で、さまざまな活動が可能です。

**Q：当日の新聞を使わなくてもできますか。**

A：日付にかかわらず取り組みます。小学校の例では、笑顔の写真や動物の写真を探す活動などであれば、当日の新聞でなくても行えます。中学・高校でもよく実践される記事スクラップであれば、人物紹介や生き方を取り上げる記事など、テーマを工夫すれば、過去の新聞でも十分活用できます。

**Q：地域の協力を得る方法もありますか。**

A：地域住民から提供してもらった新聞を活用している学校もあります。宮崎県のある小学校では、近所で一人暮らしをする高齢者宅を親と一緒に訪問し、新聞を譲ってもらい取り組みをしています。新聞入手と高齢者の見守りをねらいに始めたところ、交流が生まれ、地域で好評ということです。町内会や「学校だより」などを通じて高齢者に協力を呼びかけるなど、地域の実情に沿って、工夫して取り組んでください。

(協力：白戸一範東京都NIE推進協議会事務局長、湯田光宮崎県NIE推進協議会事務局長、田崎香織高千穂町立高千穂小学校教諭〈NIEアドバイザー〉、関口修司日本新聞協会NIEコーディネーター)

# 新聞の「命」

情報化の進展やソーシャルメディアの台頭は、新聞界にも新たな課題を突きつけている。新聞というメディアが今、どのような課題と向き合い、日々、報道しているのか。新聞社の置かれている現状から、社会全体で育むべき情報リテラシーの必要性が見えてくる。「フェイクニュース」を切り口に、情報化社会で新聞が果たす役割について、新聞記者の目線から紹介いただいた。

## 「フェイクニュース」問題から考える 新聞で磨くメディアリテラシー



朝日新聞東京本社  
IT専門記者  
和博 平

「フェイクニュース」にだまされないうために、何が必要か？

2016年の米大統領選の混乱ぶりを目にし、しかも背後に「フェイクニュース」の氾濫があったと耳にすれば、誰もがそんな気になるだろう。

オーストラリアのマッコリー英語辞典は「フェイクニュース」をこう定義している。

「政治目的や、ウェブサイトのアクセスを増やすために、サイトから配信される偽情報やデマ。ソーシャルメディアによ

って拡散される間違った情報」

事実ではない情報が「ニュース」の顔をしてネットにあふれる。「ローマ法王がトランプ氏支持を表明」。米大統領選をめぐるそんなフェイクニュースが、フェイスブックなどで100万回以上も共有されていた。

フェイクニュースがネットを席巻し、現実のニュースよりも影響力を持つようになれば、人々は事実かどうかを顧みなくなるだろう。自分の信じたいものだけを信じる「情報のタコソボ化」は、民主主義を破壊してしまうかもしれない。

### 偽情報の拡散に

#### 加担しないために

それでは、フェイクニュース

にどう対処すればいいのか？対策にはさまざまなレベルがある。

拡散の舞台となってきたフェイスブックやグーグルなどの事業者は、そのサービスからフェイクニュースを排除する責任を問われている。

ユーザーも無縁ではない。ソーシャルメディアでは、ユーザーは情報の受信者であると同時に、発信者でもある。友人からスマートフォンに流れてきたフェイクニュースは、指先一つで共有できる。だがその共有で、フェイクニュースの拡散に加担した当事者になってしまう。

フェイクニュースにだまされず、拡散にも加担しないためには、情報を取り扱う能力「メディアリテラシー」を、ソーシャルメディア時代に合わせていく必要がある。

### 基本的な「情報確認」で

#### フェイクニュースを排除

ソーシャルメディアでは、本物のニュースもフェイクニュースも、見た目に違いはない。表示されるのは見出しと写真と書

き出しの数行だけだ。ここで多くの人は、本文を読まないで共有してしまう傾向がある。広く拡散したフェイクニュースでは、8割以上が本文を読んでいなかったという調査もある。共有する前に、まず「本文に目を通す」こと。そうすれば、情報の真偽を判断する手がかりになる。

「発信者は誰か」を確認することも重要だ。広く知られているメディアか、聞いたことのないブローガーか、実名か匿名か。これまでにどんな情報を発信してきたのか。それらは、情報の信頼度の判断材料になる。

ニュースには発表の主体などの「情報源」が示される。それがどこかもポイントだ。公的機関なのか、先月できたばかりのブログか。そのニュースを複数のメディアが報じているか。その内容に違いはないか。

そして「画像は本物か」。全く別の事件の画像を流用していないか、画像に加工をすることです実を改ざんしていないか。グーグルのサービス「画像検

索」などを使えば、その画像がどこからきたものか、加工されているか、などの点が確認できる可能性がある。

そんな基本的な確認事項を理解するだけで、フェイクニュースの排除に役立つ。

### 新聞の「ファクトチェック」で 育成できるリテラシー

新聞が果たす役割もある。その一つが「ファクトチェック」と呼ばれる事実確認だ。情報の真偽を、事実をもとに確認していく。それは、新聞の日々の作業でもある。ただ、そのノウハウは、あまり読者に伝えられることはなかった。

事実確認の手法や過程、その結果をオープンにし、幅広く読者と共有していくことで、メディアリテラシーの普及にもつながる。実際に米国では、既存メディア、ソーシャルメディア、研究者らが連携して、そのようなメディアリテラシー推進の取り組みを始めている。

NIEのさらなる取り組みが、まさに求められる分野でもあるだろう。

## NIEアドバイザー紹介

- ① 学校名
- ② 担当教科
- ③ NIE 実践歴
- ④ 新聞を活用するうえでの工夫を一言  
(敬称略)



●北海道  
川端 裕介  
(かわばた・ゆうすけ)  
①函館市立亀田中学校  
②社会科  
③11年

④授業の導入やまとめに新聞記事を活用するほか、特別活動での「はがき新聞」の作成や、新聞型学級通信の発行で工夫をしている。



●宮城県  
齋藤 昭雄  
(さいとう・あきお)  
①元仙台市立鹿野小学校  
②小学校全科  
③25年

④新聞を開く楽しみは、知的好奇心をくすぐられる心地よさ。学校教育はもちろん、社会教育の場での新聞活用も考えていきたい。



●兵庫県  
万壽本 寛之  
(まんじゅもと・ひろゆき)  
①姫路市立青山小学校  
②小学校全科  
③7年

④児童の興味・関心のある記事を選んだり、子供が気軽に新聞に触れ、すぐに調べられるように、世界地図や辞書を新聞の近くに置いている。



●島根県  
和田 倫寛  
(わだ・みちひろ)  
①松江市立持田小学校  
②小学校全科  
③11年

④新聞は、教室と社会との間にある窓のようなものである。どの窓から何を見せるか、またその窓をどう磨くか考えていきたい。



●宮崎県  
田村 智宣  
(たむら・ともり)  
①宮崎県教育庁  
②社会科  
③3年

④新鮮で生きた教材である新聞を、手に取りやすくする環境づくりと、授業のねらいに応じた活用を心がけること。



●北海道  
池田 圭子  
(いけだ・けいこ)  
①音更町立南中音更小学校  
②小学校全科  
③12年

④はがき新聞を活用した学習活動、朝の会での新聞の読み合いを行っている。日常的に対話・発信を行い、主体的に学ぶ実践に取り組んでいる。



●北海道  
盛永 美樹  
(もりなが・みき)  
①平取町立平取中学校  
②社会科  
③26年

④興味・関心を高める資料、話し合い活動を深める資料など、教師が活用目的をはっきりさせて活用することが大切と考えている。



●長野県  
青木 一男  
(あおき・かずお)  
①長野市立松代小学校  
②小学校全科、社会科  
③1年

④地域を知る窓口として、子供たちと新聞を見たり読んだりしている。そこで学んだことを新聞で表現し、地域に発信している。



●兵庫県  
吉田 裕美  
(よしだ・ひろみ)  
①姫路市立白鷺小学校  
②小学校全科  
③3年

④児童の身近な所に新聞を置き、気軽に新聞を授業の中に取り入れる。そこから、新聞に興味を持ち、社会に目を向ける子供が増える。



●大分県  
佐田 香織  
(さだ・かおり)  
①大分県教育センター  
②英語科  
③7年

④どの校種、どの教科でも活用できるのがNIEの魅力。子供につけたい力を意識して、ねらいに応じた活用をしていきたい。



●宮崎県  
田崎 香織  
(たさき・かおり)  
①高千穂町立高千穂小学校  
②小学校全科  
③20年

④生まれ育った故郷に誇りを持ち、将来、故郷に貢献できる強くて優しい子供の育成を目指したNIEの実践を積み重ねていきたい。



●北海道  
高橋 正一  
(たかはし・しょういち)  
①利尻町立杏形小学校  
②国語科、社会科、道徳  
③6年

④心に残るイイ話、好奇心を刺激する話題、「おやっ」と目を引く広告など、新聞から見つけたネタを授業づくりに生かしている。



●宮城県  
坂本 謙  
(さかもと・けん)  
①柴田町立船岡小学校  
②社会科、国語科  
③7年

④新聞には、出来事や意見を伝える文章がある。これらの文章の特徴を押さえて新聞を活用すると、児童の能力がより一層高められる。



●新潟県  
佐藤 宏欣  
(さとう・ひろよし)  
①新潟市教育委員会  
②中学校社会科  
③10年

④新聞記事は授業改善にとっても有効である。生徒と新聞に記載された「ひと・こと」をつなぐツールとして、活用方法を広めたい。



●鳥取県  
生田 文子  
(いくた・ふみこ)  
①元倉吉市立明倫小学校  
②小学校全科  
③5年

④教科書や教室の向こうには、「広がる学び」「深まる学び」があることを、児童・生徒も教職員も感じられるように。



●大分県  
田辺 玲子  
(たなべ・れいこ)  
①大分県教育センター  
②国語、総合的な学習の時間  
③20年

④何のために読むのか、使うのか、目的を明確に示す。あるテーマについて、複数の新聞を重ね読みするよう促す。新聞活用のよさや気づきを生徒自身に押さえさせる。



●宮崎県  
木幡 佳子  
(こはた・よしこ)  
①宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校  
②社会科  
③10年

④グローバルな社会を生きていく子供たちが、未知の我を求めて、豊かな感性を磨くことのできる新聞の活用をめざしていきたい。

◇大学入試改革に関し意見書提出  
新聞協会は6月6日、高大接続改革(大学入試改革)案へのNIE委員長名の意見書を文部科学省に提出した。「大学入学共通テスト(仮称)」で測ろうとする力を育むため、新聞活用教育の推進を求めた。



新しい学びは新聞とともに  
生徒は、全国学力・学習状況調査の正答率が高い傾向を示すデータ等を掲載し、NIEタイムの実施など日常的な取り組みが子供たちの力を伸ばすことを訴えた。A4三つ折り。NIEサイトからダウンロードできる。

NIE  
フラッシュニュース

◇NIEリーフレットを作成

NIE実践の裾野を広げるため新聞協会は7月、リーフレット「新しい学びは新聞とともに」を作成した。新学習指導要領で子供たちに求められている力が、新聞活用で育つことを伝える内容。新聞読書の習慣がある児童生徒は、全国学力・学習状況調査の正答率が高い傾向を示すデータ等を掲載し、NIEタイムの実施など日常的な取り組みが子供たちの力を伸ばすことを訴えた。A4三つ折り。NIEサイトからダウンロードできる。



2016年度よりNIE実践指定校として活動してきた本校の実践を紹介したい。

まず、週に一度、全校体制でNIE活動に取り組んでいる。月曜日を「NIEの日」とし、新聞を読んで感想を書く活動を年間通して行った。帰りの会で配布された記事を読み、140〜200字で感想を書く。毎回二つ、担任に良いものを選んでもらい、図書室に掲示している。また、毎週木曜日の朝、下野新聞コラム「雷鳴抄」の書き写しを行った。これは、書き写す作業を通し、学習への集中力を

### 事務局長から一言

益子焼で全国的に有名な益子町の、のどかな山村の一角に七井中学校はある。学校を訪れると生徒たちが元気なあいさつを

鍛える目的で実施したものであ  
る。初めは書くのに時間がかか  
った生徒も次第に早く正確に写

せるようになり、実施後半年を  
過ぎた現在では、定期テストの  
書き間違いなどもかなり減るよ

## 益子町立七井中学校

教諭 永嶋 博美

◎栃木県芳賀郡益子町／校長・羽石 郁男／生徒数・173人  
◎特色・七井中学校は、栃木県益子町の東北部に位置する小規模校である。全戸数の3割弱が農業関係の仕事に従事する、のどかで自然豊かな地域であり、生徒も全体的に素直でのんびりとしている。小規模校の良さを生かし、生徒同士の学年を越えた活動や交流が盛んで、スポーツフェスティバルや運動会の応援団演舞などの特色ある行事に主体的に取り組んでいる。



教室前の新聞閲覧コーナーで



出前授業に取り組む生徒

うになった。

さらに、生徒が身近で新聞に  
触れるための環境整備を行った。  
各学年の廊下に「新聞閲覧コー  
ナー」を設け、休み時間に生徒  
が自由に読めるようにした。す  
ぐ手に取れる場所に設置したこ  
とで、生徒が新聞を読む姿をよ  
く見かけるようになり、記事に  
ついての会話も聞けるようにな  
った。

他にも、各教科での新聞を取  
り入れた授業、新聞への投稿、  
新聞社の出前授業などに取り組  
んだ。その実践の中で感じたの  
は、「続けること」「身近であるこ  
と」の大切さである。メディア  
は多くあるが、「新聞はおもし  
ろい」——生徒にそう実感させ  
ることで、論理的に文章を読み、  
表現し、社会への関心を高めら  
れるようになると期待したい。

った教材をみると、こんなにも  
新聞は多岐にわたって学習に活  
用できるのか、と感心するとと  
もに、NIEの可能性を実感する。

(栃木県NIE推進協議会事務  
局長・松嶋功雄)



米大統領選のあと話題になっ  
ている「フェイク(偽)ニュー  
ス」をテーマにした新聞関係者  
の会合でのこと。「SNSなど  
ネットで拡散されたフェイクニ  
ュースと新聞記事は区別がつか  
ない」という話になった◆ネッ  
トが混迷を深める今こそ「紙」  
の新聞の出番だ。新聞はファク  
ト(事実)には自信がある。記  
事を紙媒体で読んでもらうこと  
で信頼性を再確認してもらおう。  
フェイクを見破る目を養うには  
もってこいのツールだと同業者  
間で意を強くした◆だが、後日  
ある高校の先生から聞いたこと。  
「多くの生徒は新聞を読まない  
からといってスマホでニュース  
を見るわけでもない。フェイク  
もファクトも関心ないので」  
◆新聞が読まれないことより深  
刻なのは社会への無関心のよう  
なネットと新聞をうまくつなぐ方  
策はあるのか。考える日々は続  
く。

(熊本日日新聞社・津山裕二)